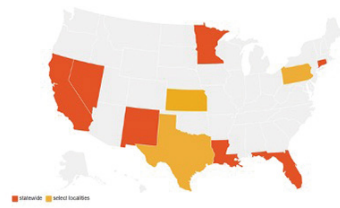


アメリカにおけるQPIの取り組み

QPIは、アメリカの弁護士キャロル・ショーファー（Carole Shauffer）氏によって創設され、ユース・ロー・センターが実施している、里親制度の改革を目指す全国的な取り組みです。2008年にフロリダ州で始まり、現在ではカリフォルニア、ネバダ、コネチカットなど10の州、80の地域（サイト）に広がっています。ユース・ロー・センターは、「QPIチャンピオン」と呼ばれる普及推進役の育成、オンライン研修の提供、ニュースレターの発行、年に1回のQPI大会の開催などを行っています。

About QPI Sites



QPIホームページ

（アメリカ版）

<https://qpi4kids.org/>



キャロル・ショーファー（Carole Shauffer）氏
インタビュー「幼い子どもたちを施設に留
めていてはいけない」（日本財団 HP より）
<https://nf-kodomokatei.jp/news/carole-shauffer.html>



QPI-Japanについて

QPI-Japanは、NPO法人家庭養育支援機構と日本財団が中心となり、社会福祉法人麦の子会と連携し、及びユース・ロー・センターの協力を得て、日本国内でQPIを推進するために立ち上げた取り組みです。

主な活動内容

- QPIの推進を目指す、または関心のある自治体関係者向けや里親向けの研修や勉強会の提供
- QPIに関するシンポジウムの開催
- アタッチメントやトラウマに関する研修の実施
- ホームページによる情報提供

お問い合わせ

NPO法人家庭養育支援機構：qpi-japan@family-childcare.org

QPI-Japanホームページ：<https://family-childcare.org/qpi-japan/>



すべての子どもに質の高い家庭養育を

クオリティ・ペアレンティング・イニシアティブ



を知っていますか？

QPI（クオリティ・ペアレンティング・イニシアティブ）は、すべての子どもたちが安心して安全で愛情にあふれた家族のもとで生活することが大切であるという基本理念のもと、質の高い里親養育を実現するための取り組みです。

家庭での養育の大切さ

子どもたちは家族と一緒にいる必要があり、特に自信や自己肯定感の芽生えや他者との親密な関係構築の基盤となるという幼い子どもたちが健全に成長し、発達するためには、愛情深い家庭環境が不可欠です。子どもたちの健やかな成長には、同じ大人が一貫してケアを行うことがとても大切です。

血縁上の親（実親）が安全な家庭環境を提供することができない場合には、子どもは愛情深い里親家庭で暮らせるようにする必要があります。特に赤ちゃんや幼い子どもについては、アタッチメントや脳の発達に関する研究から、職員が交代となる施設での集団養育よりも、特定の大人が愛情を注いで育てる「家庭での養育」の方が望ましいことが明らかになっています。

またQPIでは、社会的養護を経験した子どもや若者、里親や実親の声を重視し、何を変えるべきかを考えていきます。実際に何が問題なのかを一番把握しているのは、当事者だからです。

「もし、自分の子どもが社会的養護のもとで暮らすことになったら、どんな環境で育ってほしいか」「すべての子どもたちが、自分を愛してくれる家族と暮らすためには、どう制度を良くしていけるのか」——QPIは、このような問いに答え、より良い家庭養育を目指す取り組みです。

QPIの里親制度についての考え方

1. 里親は尊重されるパートナーであり、専門家チームの一員です。

里親は単に子どもに寝る場所を提供するだけの素人ではありません。毎日子どもたちと生活を共にする里親こそが、その子どもを最もよく知る存在であり、専門家として尊重されるべき存在です。

2. 里親は子どもを実子と同様に育てます。

自治体は、里子が他の子ども達と同じ活動ができるように支援します。

里親は、実子と同様に里子と生活し、学校行事への参加や通院の付き添いなどを行う事が求められます。また、友達や里親の実家へのお泊りや、旅行なども、一般の子どもたちと同じように経験できるように自治体も支援します。これらが許されないと、子どもは疎外感を感じたり、「自分が悪い子だから」「里親に嫌われているから」と誤解してしまったりする恐れがあります。

3. 全ての関係者がアタッチメント、トラウマ、子どもの発達について

学ぶ必要があります。

里親、児童相談所、里親支援センター、フォスティング機関など、すべての関係者は、アタッチメント、トラウマ、子どもの発達について学ぶ必要があります。たとえ自分の子どもにとって素晴らしい親であったとしても、虐待、ネグレクト、トラウマなどの逆境体験を経験した子どもにとって素晴らしい親になれるとは限りません。このような子どもとかわる里親や関係機関は、こどもと過ごす十分な時間とともに、こどものシグナルに敏感で適切な反応を求められるため、特別な理解とスキルが求められます。

4. 里親には、子どもについての全ての情報を伝えます。

里親の情報の扱いに不安があるという理由で、里親に子どもについての情報を渡さないケースがあります。しかし、里親は専門家チームの一員です。毎日と一緒に過ごす里親が、子どもの過去のトラウマなどをしっかり理解してこそ、より良い養育が可能になります。

5. 里親はケースプランに参加し、自治体は里親の意見を尊重します。

一般的に、一緒に暮らしている親が子どもの情報を最もよく把握しており、それは里親も同じです。里親のいないところで子どもに関する決定を下すことは、子どもにとっても不利益になり得ます。児童相談所は里親の意見に耳を傾け、それを考慮すべきです。同時に里親も、子どもに感情面でしっかり向き合い、子どもが何を必要としているかを理解する必要があります。

6. 里親と子どもの関係を可能な限り継続します。

子どもが里親家庭を離れた後も、本人が望む場合には里親と会えるようにすることが重要です。数か月から数年も一緒に暮らした人と、家を出た途端に二度と会えなくなるのは望ましくありません。継続的な関係は安心感を支えます。信頼していた大人が突然消えてしまうことは子どもに悪影響を及ぼす可能性がありますし、「お金をもらっている期間だけ自分を気にかけていたんだ」と子どもに誤解させてしまう恐れもあります。里親家庭を離れた後も、今暮らしている方々との関係を大切にし、自分の人生を応援してくれる人の存在がこどもへの大きな励みとなるでしょう。

7. 里親は実親と協働し、パートナーシップとして子育てをします。

里親と実親が分断されていると、子どもが両者の間で葛藤し、それぞれの親への気持ちが引き裂かれるように感じる場合があります。子どもが実親を裏切ると感じることなく、里親にも愛情を持てるようにすることが重要です。必要に応じて里親は面会交流に同席し、実親と協力的な関係を築くことで、子どもが実家に戻った後もスムーズな交流が続けやすくなります。アメリカのQPIでは、子どもが里親家庭に委託される際、ソーシャルワーカーと里親が速やかに実親へ連絡を取ることが推奨されています。州によっては法律で定められており、この取り取りは、実親と児童相談所との間の緊張関係を和らげることに効果的です。

8. 里親が必要とするあらゆる支援を提供し、新人里親への研修や支援には、

経験豊富な先輩里親が参加することが大切です。

里親が子どもにとって良い家庭となるためには、必要な支援が十分に提供されることが重要です。児童相談所や里親支援センターが研修や支援を担う事が多いかもしれませんが、彼らの役割は里親とは異なります。新人の医師や弁護士が、ベテランの医師や弁護士から学ぶように、里親の研修や支援に、家庭養育の経験のある里親がかかわる仕組みづくりが望まれます。

9. 里親の役割と禁止事項は、できる限り具体的に説明します。

里親に何が求められているのか、また何をしてはいけないのかについて、できる限り具体的に説明することで、子どもにとって良い養育を行うことができるようになります。してはいけない事項に関しては、里親だけでなく支援機関の力を借りることも必要です。

10. 地域で当事者、経験者、現場の関係者が話し合い、制度を改革していきます。

制度を一番よく知っているのは、社会的養護を経験した当事者やユース、里親、実親です。自治体で当事者を含むQPI委員会を構成し、定期的に話し合いを重ねることで、子どもによりよい制度となるよう考えていきます。

「パートナー・ファミリー」

QPIでは、里親は実親と協働するパートナーであると考え、「パートナー・ファミリー」という呼称を使っていく予定です。